ウィリアム・ジェイムズの真理論

——真理の功利性について——

村　野　宣　男

序

アメリカ哲学としてのプラグマティズムはパース（C. S. Peirce, 1839〜1914）によって唱導され，ウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842—1910）の『プラグマティズム』によって広く世に知られるようになった。プラグマティズムは，当時英米を支配していたヘーゲル的合理主義者ブラッドレー(F. H. Bradely, 1846—1924)およびロイス(Josiah Royce 1855—1916)等の流れに対するアンチテーゼとして提出されたものである。ヘーゲル主義者にとっては，世界の設計図はすでに合理的にでき上がっており，世界におけるあらゆる現象は合理的な観点から正当化されている。ジェイムズは特に悪（evil）が正当化されているところに強く反撥を感じた。ジェイムズは，知的で抽象的なヘーゲル主義に対して，経験と具体性を重んじ，世界はでき上がっておるのではなくして人間が作り上げて行くのであり，このような意図に役立つ観念こそ真であるという思想を基本としたプラグマティズムを提出したのである。このようなプラグマティズムが新大陸アメリカにとってふさわしいものであったことはいうまでもない。ヘーゲル主義に反撥した者の中には，ラッセル(B. Russell, 1872—1970)や，モーア（G. E. Moore, 1873—1958）のように経験主義の立場にありながら，論理的分析を重んじ，分析哲学の方向に行ったものもいる。しかしプラグマティズムは，単に経験主義的・分析的立場に立つのではなく，人間の“生”に目を向けているのであり，人間の創造性，倫理性，宗教性などが重視されているのである。ジェイムズの思想は，英国のシラー（F. C. S. Schiller, 1864—1937）の Humanism および，ベルグソン（H. Bergson, 1859—1941）の思想とも近い関係にある。

いかなる哲学もある方法によって体系化されているのであるが，ジェイムズはプラグマティズムにおける方法論を強調して次のように述べる。“まず第一に，少なくともプラグマティズムは，いかなる特殊な結論にも偏見を持つものではない。プラグマティズムはその方法以外にいかなるドグマも教義も持たないのである”[1]。パースは，プラグマティズムの方法を意味決定の方法としたのに対して，ジェイムズはプラグマティズムを意味論よりさらに真理論へと発展させ，プラグマティズムの方法を真理決定の方法とした。ジェイムズでは真理とは何か，真理決定の規準は何かが大きな問題となっている。この真理論において，ジェイムズは，ヘーゲルに代表されるような知的合理主義を排し，次のような方向において考えようとする。すなわち“私は……唯名論に，それが常に具体的個物にかかわっているという意味で同調する。また，功利主義に，それが実際的側面を強調する意味で同調し，実証主義には，それが言葉の上の解決，無益な疑問，形而上学的抽象を嫌うという意味で同調するのである。”[2] ジェイムズの真理論には，実証主義的側面とともに，功利主義的側面がみられる。また，一般に真理は不変なものと考えられておるが，ジェイムズは真理は変化するものとする。さらに，真理は

人間が作り出すものではなく，すでに存在している真理を人間が見い出して行くものであるとするのが一般的見解とすれば，ジェイムズは真理は人間の産物であるとするのである。ジェイムズのプラグマティズムには，このように諸側面が存しているため，『プラグマティズム』を一読した時，たとえそこに平易な表現が使われており，また，われわれの心情に訴えるものを持っているとはいえ，しばしば論点が矛盾しているように思われ，論理的一貫性をもって理解することが困難なのである。このような諸側面を持つジェイムズの真理論は合理主義者ばかりでなく，ラッセルやモーアのような経験論の立場に立つ分析哲学者からも批判されている。

ジェイムズの真理論には実証主義的側面の外，次の三つの側面，(1)真理を功利性の面からみる側面，(2)真理を可変的とみる側面，(3)真理は人間の産物であるとする側面がある。本論においては，このうちの第一の側面を取り上げて批判的な追求を行ないたい。第二，第三の側面も，ジェイムズの真理論をユニークにしているものなのであるが，第一の側面が，最もプラグマティズムの真理論を特徴づけているものと思われる。この問題の追求を次のような順序で行ないたい。まずモーアの『Philosophical Studies』における "William James' 'Pragmatism'" によって，分析哲学の立場からのジェイムズ真理論の批判をみたい。次に，論理実証主義者でありながら，ジェイムズに好意を示しているエアー（A. J. Ayer, 1910～）の『The Origin of Pragmatism』（1968）におけるジェイムズ理解の立場を見，最後にジェイムズの真理論を総括し，そこに残されている問題点を指摘してみたい。

(1) W. James, "Pragmatism," Pragmatism and four Essays from The Meaning of Truth, New York, 1960, P. 47.
(2) ibid. p. 47.

I

モーアは，"William James' 'Pragmatism'" の中で，ジェイムズの真理論を先に挙げた三つの側面，功利性と真理の結合，可変的真理，人間の産物としての真理の側面から微細に検討批判している。ここでは，本論の主題となるところの第一の側面に対するモーアの批判を紹介してみよう。

ジェイムズは，真理と功利性とが結合することをかなり明確に述べている。"あなたは，観念（idea）に関して次のどちらの言い方もできる。すなわち'それは真であるから有用である'とも，'それは有用であるから真である'ともいえるのである"[1] 真理を行為の為の道具としてみる見方も真理と功利性を結びつけるものであろう。"真なる考えを持つということは，いかなる場合も行為に関して価値ある道具を持つということである"[2] モーアはこのようなジェイムズの主張に対して分析的に批判を試みようとする。まずモーアは，ジェイムズは，(1)"全てのわれわれの真の観念は有益である" (2)"有益であるわれわれの観念の全ては真である" という二つの命題を主張しているものとして，これらの命題の真偽を検討しようとする。ジェイムズが第一の命題を文字通り主張しているものでないことをモーアは認める。ジェイムズは，たとえば，2×2＝4は真であるとしても常々この計算を繰り返していても益があるわけではないとして，真の観念は常には有益でないとしている。しかし，もちろん2×2＝4が有益である場合が存するわけである。ここでモーアは，ジェイムズは，真の観念は少な

くとも一度は功利性と結びつくことを意味しているのかと問う。この問に対して，モーアは，歴史上たった一度しか起こらない真なる観念で有益でないものがあるという事実を示す。たとえば，無為にあるものの数を正確に数えた場合，得られた観念は真なる観念だが，これは有益とはいえないであろうとする。しかもモーアは，次のようにつけ加えることを忘れない。“明らかに無為になることは時には有益であろう。そして無為はしばしば無為でないことと同様好ましい。しかし，人には時々，彼等の時間が別のことに費やされた方がよい場合にも，無為なることをするというのは確実に真なのである。”[3] しかし，モーアの批判は，“有益であるわれわれの観念は全て真である。” という第二の命題により強く向けられている。モーアは，有益である観念が真ではないという事実を次のような例によって示す。“たとえば，戦争において，軍隊が敵に対してその軍隊が一定の時にどこにいるかということに関して偽りの観念を与えんとすることは正当な行為である。このような偽りの観念は時々与えられ，それがしばしば有益であることは，私にとっては全く明らかのように思われる。”[4] また，モーアは，遅れている時計を正しいと思い誤り，事故のあった汽車に乗らないですんだケースを別の例として示している。

以上のような批判を考慮して，われわれの真の観念のほとんどは有益であり，有益であるほとんどの観念は真であるとすれば問題はないであろう。しかしモーアは，ジェイムズは単にこのようなことを主張しようとしていたのではなくして，これ以上のことを述べようとしているのであり，その点がジェイムズの真理論を特異なものとし，また，面白いものにしていると主張するのである。すなわちジェイムズは真理と功利性の結びつきを限定的に考えていたのではなく，真理と功利性をイコールで結びつけようとしていたのだとするのである。これは，ジェイムズが，宗教的観念の真理性を述べる時に見られるとする。ジェイムズは，宗教的観念は，人に休らぎを与え，また，エネルギーを与えるという意味で，その功利性から真理性を主張しようとしているのであるが，このような宗教的観念における真理と功利性の等置を批判してモーアは次のように述べる。“永遠の地獄に関する信念が多くの人々にとってしばしば有益でなかったという事を確信するのは非常に難しいように思われる。しかし，この観念が真であるかどうかということは疑われ得るのである。同じく，死後の幸福な生活に関する信念，神の存在に関する信念に関しても，これらの信念がしばしば今まで有益でなく，現在も尚有益でないと確信することは困難である。しかし，これらの信念が真であるかどうかは疑われ得るのである。”[5] モーアは，このような点に，ジェイムズの真理論における根本的矛盾を指摘している。“このような理論は，次のようなことを意味するであろう。すなわち，ジェイムズ教授が存在して，ある思想を持っているという私の観念が，もし有益であるとするならば，この観念は，たとえジェイムズ教授が存在しなかったにしても真であるということを意味しているのである。”[6] 同様の批判は，ラッセルからも出されており，次のようにいわれる。“もし……われわれが真理という言葉のプラグマティックな定義を受け入れることに同意するならば，Aが存在するという信念は，たとえAが存在しなくとも真になることができる。”[7] 以上のような分析的立場からのジェイムズ批判は，ジェイムズの真意を見失う恐れもあると思われるが，ジェイムズの真理論における問題点を明確にする上で有効であると思われる。次に，ジェイムズをより理解する立場でなされたエアーのジェイムズに関する見解をみよう。

1) W. James, "Pragmatism," p. 135.
2) ibid. p. 134.
3) G. E. Moore, "William James' 'Pragmatism,' Philosophical Studies, London, 1965, p. p. 111～2.
4) ibid. p. 113.
5) ibid. p. 114.
6) ibid. p. 127.
7) B. Russell, "William James's Conception of Truth," Philosophical Essays, London, 1966, p. 129.

II

エアーは,『Language, Truth and Logic』[1] を著したところの論理実証主義者であり，価値に関する陳述 (statement) は，検証 (verification) の対象にならないと主張するものであるが，『The Origin of Pragmatism』においては，ジェイムズに好意的な態度をとり，真意を解そうとしている。エアーは，ジェイムズの哲学における混乱の原因を次のようにみる。"ジェイムズが彼の意見を述べる際の真摯さ，すなわち人生観としての哲学に付与したところの重要性は，彼をして技術的細部に関する問題を不注意にさせた。"[2] そして"ほとんど例外なしに，ジェイムズのプラグマティズムを批判するものは，ジェイムズの著作の精神よりもむしろ単に字ずらのみに関して語っているとジェイムズが苦情をいう十分な理由があったのである。"[3] と述べている。ここでエアーがジェイムズをどのように理解しているかを見よう。

ジェイムズは，真理性と功利性を結びつけて考えているわけであるが，エアーは，ジェイムズが，客観的事実あるいは論理的関係の領域において，真理性と功利性と結びつけていたとは考えられないとする。モーアの批判は，功利性の観点から真理を見るならば，客観的事実の観点において偽，あるいは未確定の場合も，ある観念は真になるということにあった。しかし，ジェイムズが，"Aを信ずることが有益であるからAが真である"ということを客観的事実に対して考えていたとするならば，彼の常識性を疑うことにもなろうとエアーは考える。そこでエアーは，ジェイムズは明らかには表現していないが，実は三種類の命題を暗黙のうちに区別しており，それぞれに別の検証方法を考えていたのであるとする。三種類の命題とは，(1)感覚的経験にかかわる事実に関する命題，(2)論理的関係に関する命題，(3)倫理的，宗教的価値に関する命題である。[4] そしてエアーは次のように述べる。"われわれが経験的事実の事柄に関する信念を検証するところの基準は，単に観念の間の関係に関するところの信念にかかわっている基準とはことなる。そしてこれらはまた，われわれの道徳的・情緒的要求を満足させる機能を持つところの信念にかかわる基準とも異なるのである。これらの区別は，ジェイムズの著作において暗に前提されているのではあるが，ジェイムズはこれらの区別に注意を払わなかったのである。私の見解では，ジェイムズがこれらの区別を明確に呈示しなかったことがジェイムズの立場が誤解されてきた原因となっていると思われる。特に，ある信念を持つことが人に満足を与えれば，その信念は真であるとされる概念は，ジェイムズによってただ第三のクラスの諸信念に適用されているのである。すなわち，条件つきで適用されているのである。しかしながら，ジェイムズは，この第三の真理決定の基準を，無条件に真理の一般的基準として提示しているものとして，ジェイムズの批判者のほとんどのものに受け取られているのである。"[5]

エアーは，このようにジェイムズは三つの異なった命題を考えており，それぞれにまた別の検証方法を考えていたとするのである。第一の経験的事実に関する命題は，われわれの感覚によって検証される。第二の論理的命題は，経験に頼ることなくして単に論理計算によって確かめられることができる。ジェイムズは，数学的および論理的関係を事物間の内的関係（inner relations）として，絶対的・不変的なものとしている。[6] ここで，第三の道徳的，宗教的事柄に関する命題の検証が，ジェイムズの真理論の特色をなすものとなるのである。エアーはこの検証に関して次のように述べる。“これらの命題を真とし，あるいは偽とするのは，これらとわれわれの感覚的経験との一致あるいは不一致ではなくして，いわば，われわれの道徳的経験（moral experience）とよばれるものとの一致あるいは不一致にあるのである。”[7] エアーは，このような検証は，功利主義（utilitiarianism）の線に沿うものであるが，またそれとは異なっているとする。功利主義によれば，道徳的命題は，その経験的結果（たとえば人間の快楽をどれだけ増したかという結果）に還元され，結局，経験的命題（empirical proposition）として検証されるのであるが，ジェイムズは道徳的命題を保持した時の主観的満足（satisfaction）を検証の基準としているとされる。[8] このジェイムズの功利主義の特質については，次節でさらに詳しく述べたい。エアーは，この道徳的検証といえるものに，問題がないとしているわけではない。[9] しかし，ジェイムズが，道徳的検証というものを考えており，この点にのみ真理性と功利性とを結びつけていたとする見解は，ジェイムズの真理論をより整理した形で理解するものであろう。

1) A. J. Ayer, Language, Truth and Logic, 1936, 1946 (2nd. ed.).
2) A. J. Ayer, The Origin of Pragmatism, MacMillan 1968, p. 185.
3) ibid. p. 185.
4) ibid. p. 196.
5) ibid. p. 201.
6) W. James, “Pragmatism,” p. 160.
7) A. J. Ayer, The Origin of Pragmatism, p. 195.
8) ibid. p. 210.
9) そもそもエアーは『Language, Truth and Logic』の中で，われわれの価値判断は根本的に相対的であると主張しており，道徳的・宗教的領域は検証の範囲を超えているものとし，これらの領域に対する検証可能性を否定している。しかし，ここでは別の観点から道徳的検証を批判している。エアーの批判の要点は，道徳律と検証という両概念は論理的に矛盾するということである。道徳律の正当性（validity）は，それを立てた時点に存するのであって，それが未来において他あるいは自己を満足させるかにあるのではない。したがって道徳的検証という概念は無意味となる。エアーはジェイムズ自身このような道徳律の性格に気づいているのであるが，明確性を欠き，混乱に陥っているとする。この問題の追求は本論では割愛することにした。

III

これまでジェイムズの真理論に関するモーアの批判ならびにエアーの見解をみて来たが，これらの批判ならびに見解を考慮しつつジェイムズのプラグマティズムを吟味することによって，ジェイムズの真理論における真理と功利性の結びつきの問題を検討してみたい。

功利性と真理との関係を論ずる際に，ジェイムズのいうところの功利主義の内容を見ておかねばな

らない。功利主義は，倫理学における一つの主張であるが，ここでは，簡単にジェイムズの意味するところをみよう。ベンサム（Jeremy Bentham, 1748—1832）やミル（John Stuart Mill, 1803—1876）の功利主義によれば，一般的にある行為の正当性は，その行為が善と悪における最大のバランスを持つところにあるとされる。この際，善と悪は，たとえば人間に対して快楽を与えるもの，苦痛を与えるものとして，道徳的見地から離れた客観的存在として決められている。したがって，行為の正当性は客観的に決定されて行くのである。すなわち，功利主義によれば，道徳的命題は，経験的命題に還元されて行くものであるが，エアーの指摘する通りに，ジェイムズは以上のような意味での功利主義者ではない。ジェイムズは，ベンサムやミルの功利主義に対して次のような批判を行なう。“ベンサム主義者，ミル主義者，ベイン主義者は，われわれの人間の理念の多くのものを取り上げ，それらが身体的快楽や苦痛からの解放をなすということを示すことにおいて不朽の貢献をなして来た。……しかし，われわれの情緒とか好みをこのような簡単な方法で説明することは確かに不可能である。”[1] ジェイムズは，道徳の問題をこのように客観的な形で，主観的道徳感情から切り離したところで取扱おうとする考え方に反撥して，何が善か悪かを主観的な感情で決定しようとする立場に立つ。すなわち“人が何ものかを善（good）と感ずる限りにおいて，彼はそれを善となすのである。それは，彼にとって善なのである”[2] といい，人がどの理念が正しいか否かという決断に迫られた場合には，ただ自己の意識のみに頼ることが是とされる。“この意識は一つの理念をそれが正しい（right）と感ずることによって正しいものとし，他の理念をそれが不正（wrong）であると感ずることによって不正とするのである。”[3] このような立場をジェイムズは直観主義者（intuitionist）の立場ともしているのである。[4] しかしながら，ジェイムズのこの直観主義は，次のような意味で功利主義的傾向と結びついている。すなわち，本来ジェイムズは，意識現象をわれわれが環境に適応するところの機能として解釈しており，心が善と感ずるところの観念は，われわれが環境に適応する為に最もよく機能するものと考えているからである。[5] また，このような主観的直観主義は，独断論に陥ることはない。すなわち丁度自然科学者が仮説を改めて行くように，経験の中で常に自己の判断を改めて行くことによって，客観主義に結びつけられていくのである。以上のような内容のジェイムズの功利主義を考慮に入れて，再び彼の真理論を検討してみよう。

ジェイムズの功利主義によれば，ある観念が有益であるということは，その観念によりわれわれが主観的満足感を持つことができるということである。われわれが満足感を持つということは，われわれが環境に最も適応していることを示しており，この際われわれが持つ観念は，その本来の機能であるところの功利的機能を果たしていることになる。しかし，ジェイムズは，エアーのいう通りにこの主観的満足性を基礎とするところの功利主義を単に道徳的，宗教的領域にのみ適応したのであろうか。エアーは，ジェイムズは経験的事実の領域においては，全く主観性を考慮しないと考えているようだが，これはジェイムズの真理論をあまりにも割り切った形で解釈しているといわねばならない。ジェイムズの真理論における特徴は，実はこの主観的判断を価値と事実の両領域にまたがって適用しているところにあるのである。すなわち認識論においてこの主観的満足という基準を用いているのである。ジェイムズの認識論において，主観的満足が特に問題となるのは，間接的認識の場合である。われわれが直接経験し得るところの対象には直接的認識が成立し得るが，たとえば“インドの虎”[6]

のような対象に関しての認識は，間接的認識経路を通して得られる。われわれの知識の大部分は，インドの虎のように直接認識されているものではなく，間接的に得られているものである。ここでジェイムズは，インドの虎という観念の真理性を，われわれがその観念を用いて行為した場合得られる調和感あるいは満足感にあるとするのである。ジェイムズはこのように間接的認識の対象となるような諸観念について次のように述べる。“このような観念は，われわれを導いて行くものである。すなわち，これらの観念は，行為あるいは別の観念を生みだしつつ，その生みだされた行為あるいは観念を通して，最初われわれが持っていた観念と一致関係にあるとわれわれが感ずる他の経験の部分にわれわれを導いて行くのである—このような感覚はわれわれの能力の中に存在しているものである。この連続性と移行性は，一点から一点へと，発展的で調和的で満足なもの（satisfactory）としてわれわれにやってくるのである。この調和するところの導きが，観念の検証を意味するところのものなのである。”[7] このように間接的認識においては，調和感・満足感が認識の基準となっているのである。このような判断の主観的基準は，エアーの指摘するように道徳的，宗教的領域にも適用されているが，以上のように客観的事実の領域にまたがって使われている。この故に，真理という言葉が価値と事実の両領域にまたがって使われることになるのである。事実認識自体が満足という要因を含んでいる為に，事実認識はまた，道徳的善という色合いを持ってくることになり，“私にこれだけのことを言わせてもらいたい。すなわち真理は善の一種であり，そして一般的に想定されているように善から区別されたカテゴリーではない。真理は善と同位置にあるものである。”[8] とされるのである。この主観的満足感は，合理性の情緒（sentiment of rationality）[9] とも規定されており，その内容についても詳しく述べられているが，ここでは，主観的満足感が価値と事実の両領域にまたがって適用されていること，また，主観的満足感がそもそも価値の問題であるとするならば，価値判断と事実認識とは切り離されない問題であることを指摘したい。

以上のようにジェイムズが，主観的満足感を価値と事実の両領域にわたる基準としているならば，エアーのようにこの基準を単に道徳的，宗教的領域に適用するのは正しくない。この点，モーアのように，ジェイムズには真理と功利性をイコールで結びつけようとしている意図があり，これがジェイムズの真理論を特異なものとし，また，面白いものにしているとする見方は正しい。しかし，この主観的基準を事実の領域に適用するなら，モーアの批判するように，ジェイムズは，ある観念を単に主観的満足感の故に真であるとすることを認めることになろう。ジェイムズの真理論に対する一般からの批判は，“単に主観的満足感によって，観念の真理性を決定する”ところに集中しているのである。ここで，ジェイムズの主観主義を保持しつつ，ジェイムズを弁護する方法はないものであろうか。われわれはここで，主観的満足の中に経験的事実を認識するところから来ている満足が含まれていることに注意せねばなるまい。ジェイムズは『プラグマティズム』の中で，経験的事実を認識することにより，環境をよりよく処理することができるとして，事実認識の功利主義的価値を主張している。しかし，これとは別の観点から，事実認識それ自体の欲求とその満足が，事実認識についていわれるのではないかと思われる。ジェイムズは，合理論者が論理的整合性を求めるのを知的欲求の故であるとしているが，[10] 経験論者も，経験的事実に忠実であり，経験を正確に写し取り描き出すという意味での知的欲求を持っているのではないか。この点で，合理論者も，経験論者も方向が異なるとはいえ，

知的欲求を持っているように思われる。ジェイムズは，観念の間接的認識を述べる際に，その観念が検証過程において，われわれを調和感あるいは満足感をもって導いて行くことがその観念の真理性を示すものとしていたが，この際この導きは，われわれを実際的に（practically）あるいは知的に（intellectually）によりよき状態に導いて行かねばならないことが述べられている。[11] すなわち，実際的あるいは知的な導きが調和感あるいは満足感の根源となっている。この知的という意味が，経験的事実を求めるところの知的満足を含んでいると考えれば，ジェイムズが単に恣意的満足によって観念を真としたという事はあり得ない。また，プラグマティズムの真理論における帰納的側面は，この経験主義的知的満足の側面を裏ずけるものである。この点，エアーのいう通りに，ジェイムズは，経験的命題，論理的命題，道徳的・宗教的命題の三種を暗黙のうちに了解していたのだと解釈することができる。しかし，ジェイムズにとっては，これら三種の命題がばらばらに存するのではなく，一つの命題が同時に，経験的，論理的，道徳的になり得るのである。そしてこの際ジェイムズにとっては，経験的命題も論理的命題も欲求の満足という主観的次元で取り扱われるのである。

しかしながら，ジェイムズの真理論は，このような経験的事実に関する知的満足の側面を考慮し主観性の側面から統一的に解釈されたからといって問題がなくなるわけではない。一つの観念を回って知的要求と道徳的・宗教的欲求が対立することがあり得るのであって，ここにジェイムズの真理論にはやはり問題が残るのである。モーアが指摘するように宗教的信念が人々に有益に働いてきたことは疑えないが，その信念が事実と付合するかどうかという問題になるとわれわれは何ともいえなくなるのである。プラグマティズムは具体性を重んじ，経験主義的態度を取るとして，ジェイムズはヘーゲル主義者が主張するような絶対的精神（the Absolute Mind）の概念が，経験的具体的事実を何も説明しないと批難する。しかし，一方において，それが宗教的慰めを与えるという意味で真理であるといおうとして次のごとく述べる。“しかし，先験的観念論の絶対者が，このような慰めを与える限りにおいて，それは確かに無駄なものではない。それは，それだけの価値を持っているのであり，それは具体的な機能を遂行するのである。よきプラグマティストとして私自身，絶対者をその限りにおいて真とよぶべきである。”[12] ここでわれわれは一つの観念を回って二つの欲求が対立していることを見ることができる。絶対者の観念は，経験主義の欲求を満足することはできない。ジェイムズは，特に現に存在する悪の問題が絶対者の観念から説明できないことをライプニッツの弁神論を批判しつつ主張している。[13] このようにジェイムズ自身の中にも，絶対者の概念をめぐり相異なる欲求が対立しているのであり，絶対者の概念はたとえ宗教的情緒をわれわれに惹起しても，絶対者が果たして経験的に事実なのか，あるいは絶対者によって経験的事実が説明し得るかという問が起こるのである。さらにこのパラドックスは，“死後に生命が存続する”という命題についてより明らかである。この命題は全く検証の手段を奪われている故に，経験的・実証主義的欲求を全く満足させることができない。このように一つの観念が，二つの対立する欲求から真であり偽であるとされるという混乱がジェイムズの真理論にはあるのである。ジェイムズがプラグマティズムは“経験主義的な思考法と人間のより宗教的要求との幸せなる調停者である”[14] とするのは，真理の主観主義的基準が両者にあてはまるところからいうのであるが，上に述べたような混乱が存在することは否めないのである。

ジェイムズの真理論における混乱を整理する方法として，真理という言葉の用法を限定する方法が

考えられよう。次のジェイムズの引用の中での“意味”という言葉に注意してみたい。“われわれがプラグマティックな原理に従う時，もし生活に有益な結果がある仮説より流れ出るならば，その仮説を拒否することはできない。普遍的概念も，それは考慮せられるべきものであり，プラグマティズムにとっては個々の感覚と同様に現実的なものである。普遍的概念はもしそれらが有益でなければ何ら意味をもたないのであるが，もしそれらが何らかの有益性をもてば，それだけの意味をもつのである。”[15]ここで普遍的概念とは，絶対者のような概念を含む意味で使われている。また“完全性は永遠であり，根源的であり，そして最もリアルであるという絶対的仮説は，完全に明確な意味を持っているのであり，それは宗教的に働いているのである”[16]といっている。ジェイムズは，宗教的概念に対して，それが“意味”を持っているといった方が，それが真であるというよりもより妥当であったとも考えられる。ある概念は，経験的・論理的な探究の要求を満足させなくとも，情緒的要求を満足させることがあり得る。ジェイムズは，“‘一つの生命，一つの真理，一つの愛，一つの原理，一つの善，一つの神’——私はこれをクリスチャン・サイエンスの小冊子より引用したのであるが……—— うたがいもなくこのような信仰の告白はプラグマティックにいって情緒的価値 (emotional value) を持っているのである……”[17]といっているように，宗教的な概念に情緒的意味を見い出しているのである。プラグマティズムにおいては，純粋な論理的・数学的探究も知的欲求を満足させるという意味を持っている。したがって，ジェイムズの真理論は意味論であると極言することができる。ここで意味論に深く立ち入るわけにはゆかないが，意味には，論理的意味，認識論的意味もあり，また，経済的，政治的，軍事的意味もあり，文学的・道徳的・宗教的意味もあるであろう。ここで真理という言葉を論理的および認識論的意味にのみ与えた方が妥当ではないかと思われる。かくして，ある観念は真理ではないが意味があるということになろう。たとえば，モーアが挙げた例のように敵に与える偽りの情報は真ではないが意味があることになる。この場合の意味は道徳的および宗教的なる情緒的なものではなく，軍事的なものである。しかしながら，道徳的・宗教的陳述に関してわれわれは，それは真ではないが意味があると問題なしにいえるであろうか。“神の概念は真ではないが意味がある”とすることによって，神の意味そのものが害なわれてくるという問題が起こるのではないか。ラッセルは，この問題を次のように指摘している。ラッセルは，ジェイムズの主張は“われわれは事実上神が存在するか，あるいは死後の生命があるかどうか知ることはできない。しかし，神や死後の生命に関する信念は真である”ということであるとして，“このような立場は，もしそれが理解されたとしても，宗教的な者に多くの慰めを与えないであろう”[18]という。上の引用でラッセルは，“神や死後の生命に関する信念”は“真”であると言っているが，“意味”があるとしても同じことである。ある種の人々は，単に宗教的観念を疑うことなく信じ，知的探究は行なわないであろう。しかし，哲学者は，たとえ宗教的観念より情緒的影響を受けるにせよ，認識論的疑問を発せざるを得なくパラドックスに巻きこまれるのである。

以上述べてきたことを結論的にまとめてみよう。本論においては，ジェイムズの真理論における真理と功利性の結びつきに関して論じてきたわけであるが，“真なるものは有益である。有益なものは真である”という命題に関して，まずモーアおよびエアーの見解をみた。ここで，両者の見解は，ジェイ

ムズが，意識を人間が環境に適応する機能であるとみている点を見逃している。ジェイムズの功利主義の意味は，ある観念が真であるとは，その観念が，われわれが環境に適応するように機能することなのである。そして，その観念が，このように機能しているかどうかは，主観的満足という尺度で計られるのである。したがって，エアーのいうように，功利主義的・判断は道徳的・宗教的命題のみに適用されるというのは誤りで，経験的命題も論理的命題も，それらが人間の意識にかかわる以上，功利主義にかかわっているのである。この点モーアのように，ジェイムズは，真理と功利性をイコールで結びつけていると見るのは正しい。しかし，一つの観念には，経験主義的欲求，論理的欲求，道徳的・宗教的欲求が交差して作用するものであって，これらの欲求が調和関係にあるとは限らない。ジェイムズは，これらの欲求は，それぞれ独立した欲求であり，その欲求を満たす客観的条件は独立したものとしているのであり，エアーの三種の命題の区別はこの点を指摘したものとしては正しい。ジェイムズは，モーアやラッセルが指摘するように，単にある観念がわれわれに物質的，精神的に有益であることより，その観念が認識的に真であるとしていたわけではない。しかしながら異種の欲求の対立という問題が，ジェイムズの真理論におけるパラドックスとして残るのである。意味論の立場より，"真理"を認識論的領域に限れば，ジェイムズの真理論の適用範囲は広くなる。真でなくとも意味がある場合があるからである。しかし，この立場も，道徳的・宗教的問題にぶつかると破綻するのである。このように，ジェイムズの真理論における功利的側面をたどってくると，真理と功利性が矛盾なくかみ合うところがあるとはいえ，道徳的・宗教的問題になると，かみ合わないところが明らかになってくる。しかるに，ジェイムズは，宗教に最も関心を寄せていたのであり，『プラグマティズム』における最大の意図は，宗教を功利性の面から真であるとしようとしたことともいえる。しかしこの意図は，少なくとも『プラグマティズム』における限りでは成功したとはいえない。しかしながらジェイムズは，『プラグマティズム』以外の著作で，功利性とは別の経験主義的側面から神の存在を明らかにしようとしている。『真理の意味』によれば，間接的認識のパターンにそえば，神の存在も保証できるという暗示を受けとることができる。『宗教経験の諸相』[19] においては"実在の感覚"（feeling of reality）から神の存在を見ようとする。さらには，ジェイムズの根本的経験論（radical empiricism）の立場からも宗教の問題を論ずることができよう。[20] また，神の概念そのものも，経験的思考法に適合するように考えられている。しかし，これらは，本論で扱う問題でない。

1) W. James, "The Moral Philosopher and Moral Life," The Will to Believe, New York, 1956, p. 186.
2) ibid. p. 191.
3) ibid. p. 193.
4) ibid. p. 189.
5) W. James, 'Reflex Action and Theism,' The Will to Believe 参照.
6) W. James, 'The Tigers in India,' The Meaning of Truth.
7) W. James, 'Pragmatism,' p. 134.
8) ibid, p. 59.
9) W. James, 'The Sentiment of Rationality,' The Will to Believe.
10) ジェイムズは『The Meaning of Truth の中で"ある人間にとっては理論は一つの情熱であり，丁度それ

は他のものにとって音楽が情熱であるのと同じである。"(p. 99) と述べている

11) W. James, 'Pragmatism,' p. 140.

12) ibid. p. p. 57–8.

13) ibid. p. p 28 ff.

14) ibid. p. 55.

15) ibid. p. 177. (傍点は筆者による)

16) ibid. p. 174. (傍点は筆者による)

17) ibid. p. 102.

18) B. Russell, 'William James's Conception of Truth,' p. 124.

19) W. James, The Varieties of Religious Experience, London, 1952, 第3講を参照

20) 高木きよ子, ウィリアム・ジェイムズの宗教思想, 大明堂, 1971, 第8章を参照